

手紙は相手に喜んでもらい、お互いの信頼関係を強めるツール

－技術、想いが凝縮された手紙に日本語力は欠かせない－

一般社団法人
手紙文化振興協会
むらかみ かずこ

ライター 上村雅代

一般社団法人手紙文化振興協会を創設し、代表理事を務める、むらかみかずこさんに、お話を伺いました。手紙文化振興協会と日本語検定委員会は、お互いに後援しています。



むらかみさんが手紙文化振興協会を立ち上げたきっかけは、彼女自身にあります。

「子どものころから手紙が好きだったから。口下手の反動です」、とのこと。友人同士の会話なら困らなくても、分かって欲しいことや大事なことを声に出すことが苦手だった。でも、「書くのであれば自分のペースで進められるし、書き直せる。（手紙は）私に向いていたんです」。

5年ほど前から本を書く機会に恵まれ、これまでに監修を含め、十数冊をご執筆されたむらかみさん。執筆の素晴らしさを感じる一方で、一方通行な媒体であると感じたといいます。よりリアルに広められる方法として講座を考え、「（講座なら）自分も成長できるし、手紙の良さを広められると思いました」。

実際に講座を始めてみると、手紙好きの人が集まり、「これまでとは比べ物にならないほどの（手紙にまつわる）情報が集まってくるようになり、世界が広がりました」。対面での講座学習に加え、この10月には通信講座「手紙の書き方講座」も開校。ますます多くの方が受講できるようになりました。

むらかみさんによると、手紙には5つの要素があります。

①紙を選ぶ。②筆記具を選ぶ。③文章を考える。④文字を書く。⑤切手を貼る。

「季節の言葉が思い浮かばなければ、今の季節感のある絵柄の便せんを選べば良いんです」。

相手には、「なんて気が利いているのかと喜んでもらえます」。

手紙は情報ではなく、気持ちを伝えるもの。メモを取るために開発された油性ボールペンよりも、インクの滲みに情感が表れる、万年筆や水性ボールペンで書くと良いそうです。

また、手紙は相手に喜んでもらい、お互いの信頼関係を強めるためのツールですから、お相手に良い印象を与え、信頼してもらえるように文章を考えます。



「どうだ」と見せつけるような仰々しい手紙は、自己満足に過ぎません。長過ぎる手紙も相手にストレスを与えかねないので、爽やかに短く、その上で自分らしく、等身大の言葉を綴ることが大切です。

手紙を書くとは、「技術、想いが凝縮された作業だ」とむらかみさん。長い手紙はただだらだら書けば長くなる。けれども短い言葉にまとめるためには、「分かり易く、きちんと相手を敬う言葉を選ばなければなりません」。

メールではあまり考えずに打つ人も、手書きする時には考えます。相手に喜んでもらいたい、さらにはできる人だと思われたいという気持ちが働くため、表現について考えたり、辞書で調べたりするのです。「その蓄積が（表現力として）自分の中に溜まっていくのです」。

手紙は、言葉を知らなければ書けません。手紙を書く時に、言葉の知識・教養は強みになります。「（言葉への）自信が書きたい気持ちを高めてくれる」とむらかみさん。日本語力が手紙を書く気持ちを高め、手紙を書くことが、日本語力を高めることになる。手紙を書くこと、日本語力にはそんな相互関係があるようです。伝えたい想いをきちんと伝えるためには、言葉を正しく選ばねばなりません。それには、使える語彙を増やしたり、正しい敬語を使うことが大切です。

「日常生活で意識していないと、どうしても言葉が限られてしまう。『知っている』と『使える』の間に壁があるんです」。

知っていても使ったことのない言葉を意識して使うこと。協会の講座では、頭のなかの「言葉の引出し」を探り、『使える』語彙を増やすためのワークも行っています。例えば、素敵なものを見た時に、「素敵」以外の言葉で表現する。同様に「かわいい」「綺麗」などだけで表現せず、よりの確かな言葉に言い換えるなどのワークを通じて、受講生は自身の語彙の少なさを認識し、学びきっかけに繋がっていきます。

「『知っている』と『使える』の間にそびえる壁」を崩すために、「日本語検定」はとても有効な方法だと、むらかみさん。また、人生を豊かに生きるという意味において、「日本語検定」を通して、言葉に気を配り語彙を増やすことは、ワクワクしながら文房具を集める作業に似ているといいます。

手紙を書くことの最終目標は、「人生を豊かに生きていく」こと。そのために日本語力を高めて考える力を養うことが、結果的に生きる力に繋がるのです。それは日本語検定が目指す目標と同じです。



一般社団法人
手紙文化振興協会

代表理事
むらかみかずこ

プロフィール

東京女子大学文理学部史学科卒。
企業経営者の仕事に込める想いを言葉にしてまとめる「小冊子」制作を手がけ、日本一の制作実績を築くとともに、企業・自治体向けの研修や一般向けの講座を数多く実施。幅広い層から支持されるとともに、今の時代に合う気軽で楽しい手紙の書き方を提唱。手書きの良さを広く社会に発信しつづけている。

一筆箋、レターセット、万年筆、記念切手などの手紙アイテムをこよなく愛し、文具会社向けに商品開発支援、レターセットの監修等を行う。

テレビ・ラジオ出演、新聞・雑誌掲載も多数。

NHK Eテレ

『まる得マガジン 心が通じる一筆箋』講師

手紙文化振興協会ホームページ

<http://www.teqami.or.jp/>



上村雅代(かみむら まさよ) プロフィール

ライター。1980年8月7日生まれ。芥川賞作家・荻野アンナ氏の助手として働きながら文章の研鑽を積む。『大震災 欲と仁義』荻野アンナとゲリラ隊(共同通信社)共著。現在、息子の育児奮闘中。最近では、人気アイドルグループNMB48のラジオ番組のシナリオを担当する等活躍中。